

# ロバート・ペン・ウォーレンの想像力の展開と その現代における意義

香ノ木 隆 臣

キーワード：ロバート・ペン・ウォーレン、創作の内的過程、記憶

## 序論

詩・小説・批評のいずれの分野でも卓越した業績を残したロバート・ペン・ウォーレンは、1905年に生まれ1989年に生涯を閉じた。もちろん人は生まれる年を選ぶことはできないが、彼は20世紀全体の歩みと共に人生を過ごしたことになる。最晩年のインタビューで、15歳の頃には自分の生まれた年と20世紀とが同期していることを意識したと、彼は述懐している(Watkins 399)。ウォーレンといえば作品と時代を切断して解釈するニュークリティックの旗手とみなされることが多いかもしれないが、実際には、彼は鋭敏に時代の動きを反映する作品や評論を次々に世に問い続けたのである。

ウォーレンの作品と、彼が生きた時代とのかかわりは深い。20世紀前半の英米文学に多大なる影響を与えた詩人・批評家の T. S. エリオットによる『荒地』に深く感化されたウォーレンは、最初に詩作を手掛け、そこから小説と批評(ニュークリティシズム)に活躍の場を広げていくが、本質的には詩人であり続けたといえる。その根底にあるのは、過去の現在性を個人の記憶と社会の動向とを並行して詩に象徴的に描き出す特異な想像力であり、過去をないがしろにする未来志向のアメリカ社会に対し、常に反省を迫り続けた危機意識がその源泉であった。本稿では、彼の生涯と多岐にわたる活動を概観した後、代表的な作品群の主題を個人と社会の連関を記憶と想起を軸にして探り、ウォーレンの作品が現代に投げかける意義を考えることとしたい。

ウォーレンは多作であることで知られ、長篇小説は全部で11作、詩集は14作、それ以外にも短篇小説、評論、歴史論などを世に問うている。代表作としてわが国で知られているのは、政治的混乱をめぐる出来事を経験し内的成長を遂げる語り手を主人公とする長篇ビルドゥングスロマン『すべて王の臣』(1946)で、刊行直後から世評は高く、ピューリツァー賞を受賞した。詩集では、『約束』(1957)と『現在と過去』(1978)の2作でそれぞれピューリツァー賞を受けている。現在まで、小説と詩の双方でこの賞に輝いたのは、ウォーレンだけである。また、批評の分野では、作品の外在的要素を排し、作品自体の自律的構造に注目したニュークリティシズムの方法論を広め、学生がある一定のレベルにまで文学作品を客観的に分析する能力を養う教育的方法論を確立し、第二次世界大戦後の文学教育で全米を席卷した。それは我が国の高等教育の場だけでなく、初等・中等教育の国語の教育の現場にも、少なからぬ影響を与えた。その教科書『詩の理解』(1938)『小説の理解』(1943)を、盟友クリアンス・ブルックスと共に著した。さらに、最晩年の1986年には最初の合衆国桂冠詩人に任ぜられ、ウォーレンはまさにアメリカを代表する文人となった。

## 第1章 自己確立への苦闘、周縁性、「歴史的感覚」

その輝かしい経歴にもかかわらず、現在では、批評界でのウォーレンの評判は決して高いとは言えないというのが、正直なところだろう。ニュークリティシズム(彼自身はその名称を嫌っていたのだが)を推し進めて確立したとされるキャンノンの文学史は、典型的に白人男性作家を中心とするものであり、現実にはきわめて政治的な作用をもってマイノリティを排除する結果を招いた、といった趣旨の批判がその典型である。とはいえ、彼の人生と作品の構成を検討すれば、その本質は、意外にも、周縁的な存在への関心にあったということがわかる。『詩の理解』と『小説の理解』は、改版するたびに扱う作品を増やし、マイナーな作家も積極的に分析の対象としている。また、1950年代半ば以降に公民権運動に火がついた時期には、『分離』(1956)や『黒人を弁護するのは誰か』(1965)といったルポルタージュや評論を刊行する。この準備のための取材で、ウォーレンは、アフリカ系アメリカ人の知識人たちに対するインタビューを数多く行っている<sup>1)</sup>。アフリカ系アメリカ人の多く暮らす地域へ出かけて人々の苦境を描き出しながら、白人中心的価値観で動くアメリカ社会に反省を迫る態度を彼は明らかにした。アメリカ社会の周縁的な存在への並々ならぬ関心を、彼は決して隠そうとはしなかったのである。

周縁性を強調する態度がはぐくまれたのは、ウォーレンが生まれ育った地理的環境条件が大きく影響したのではないかと思われる。彼が生まれたケンタッキー州ガスリーは、現在ではごく

小さな町であるが、当時は地方における鉄道の拠点となる、さまざまな人々が行き交うそれなりに存在感のある町であった。この町は、テネシー州との州境に位置し、南北戦争当時は北部と南部との境界にあたる場でもあった点が、彼の自己形成に大きな意味をもつ。ケンタッキー州では、家族や親戚が、北軍と南軍に分かれて従軍しお互いに戦うという、現代の政治的思想的状況にも通底する悲劇的分断を経験したと伝えられている。

ウォーレンは周縁的な環境に育ち、かつては文学を志望し挫折した父親との精神的葛藤にも悩みつつ、自己確立に苦しんだ。また、幼かったころの不幸な事故で片目を失明したことによる強い精神的衝撃も、彼の内面に大きな影響を及ぼした。兄弟で外の庭で遊んでいた際、弟が投げた石が偶然にウォーレンの右目にあたった。その治療結果は芳しからざるものであり、右目を摘出せざるを得なくなる。彼は後に海軍将校を目指すのだが、この視力の問題でその夢をあきらめて、16歳でヴァンダービルト大学に入学することになる。当初は理系の学部在籍していたが、英作文のクラスを担当した教師ジョン・クロウ・ランサムにその文才を見出され、文学専攻にコースを変更したのである。外因による挫折は大なり小なり誰にでもあることなのだろうが、彼の場合、自らの意思で進路を選ぶことができなかつたという一種の負い目ゆえに、自分の将来に不安が常につきまとったようである。彼は大学入学後しばらくして自殺未遂を起こしているからである。

1921年、ヴァンダービルト大学に入学してまもなく、ウォーレンはクロロフォルムを浸した布で自分の顔を覆い意識不明になっているところを友人らに見えされる。「自分は詩人になれない」という内容の書置きがあったと伝わる。重要なのは、多くのインタビューに応じてきた彼が、この当時の事情や初期の詩に関しては、ほとんど何も語ってこなかつた事実である。あえてコメントを避けるその態度は、この時期が実は自己形成にとってたいへんに重大な意味をもっていたことを、逆説的に物語っているといえよう。彼の初期の詩作は、死をめぐる思考が展開する、暗鬱な内容のもので占められており、彼の内面がいかに死に傾斜していたかを容易にうかがい知ることができる。

しかし、その後しばらく、詩をほとんど書かない時期を過ぎ、南部農本主義に加わるなどの社会性の強い作風へ彼は変貌したのである。ここで注意しておくべきは、この時期のウォーレンの苦悩が、心理学者アンリ・エランペルジェが「創造の病」(creative illness)と定義した、創作という世界に生きる者が重大な精神的危機を経て作風を大きく変える一連の経緯に、見事に合致する点である。この「創造の病」とは、1. 集中して知的な苦勞の後に出現することが多く、2. 本人はその作業に心身ともに没入し、3. この「病」が終わるのは単なる回復ではなく、精神的な回心を遂げ、4. その後、終生にわたり変革した人格が継続する、という特徴をもつ (Ellenberger 25-41)。

こうした一種の死の体験を経て、エリオットが“Tradition and the Individual Talent”「伝統と個人の才能」で指摘した、過去の作品と現在のそれとを同時に知覚する能力「歴史的感覚」(“the historical sense”)を、ウォーレンは身につけたのではないだろうか。

Tradition is a matter of much wider significance. It cannot be inherited, and if you want it you must obtain it by great labour. It involves, in the first place, the historical sense, which we may call nearly indispensable to any one who would continue to be a poet beyond his twenty-fifth year; and the historical sense involves a perception, not only of the pastness of the past, but of its presence; the historical sense compels a man to write not merely with his own generation in his bones, but with a feeling that the whole of the literature of Europe from Homer and within it the whole of the literature of his own country has a simultaneous existence and composes a simultaneous order.

(Eliot 14) (下線部は引用者による。)

初期の詩で詩をめぐる苦悩を吐露する創作の過程で、死を核とする他者との連関に、彼は思いを致したと考えられる。社会的評論を手掛けるようになっただけでなく、死が出発点となって周囲の人間関係の意味に気づくという趣旨の小説や詩を、この後のウォーレンは数多く発表していくからである。この、死を媒介とする他者との連関というヴィジョンについては、精神医学者渡辺哲夫が『死者の発見』で述べた、「死者の発見とは、それゆえ、死者を“顔”として見出すこと、そして、その“顔”が無量無数の死者たちの群れの“顔”にほかならないことを思い出すことなのである。(中略) 発見された死者たちは、“顔”として、言葉として、われわれを主体、歴史的に構造化された存在にしてくれる」(渡辺 239-40) という、個人の死を具体的に認識することで生ける者の相互連関が達成されるという内容の発言にその意義がうかがわれるし、精神病理学者木村敏は、「私を個別的自己ならしめている私の歴史性は、私が死すべき存在、死へ向かっての存在であることと深くかかわっている。(中略) 死が私の存在の歴史性に関わっているのは、なによりもまず、終末の定めのないところには歴史が成立しえないからだといってよいだろう」と自己の死がもつ意味を語る(木村 113)。さらに付言すれば、死とは自己にとっては未来の出来事である一方で、“join the majority”という表現がある通り、過去には無数の死者が存在する。ウォーレンも、自己の死の一步手前の体験を経て、過去の死者たちとの精神的交感を果たし歴史的感覚を認識したと推測できるのである。

現在において過去を同時に知覚する能力である歴史的感覚が胚胎する下地になっていたのは、南北戦争に従軍した祖父から聞いた戦場の物語が、幼いウォーレンには不思議な現実性を持ち、過去と現在が不可分に存在する感覚にとらわれた心的現実である。祖父から南北戦争の

話を聞いていた彼は、過去と現実の境界があいまいに感じられるようになった。

A different feeling toward the present event and the past event somehow overlap in what was like a double-exposure photograph almost.... “The sense of the past and the sense of present are somehow intertwined constantly. This was a cultural factor in the south; the telling of tales was part of it.”

(Watkins 124)

膨大な死者を出した南北戦争も、ウォーレンにとっては、死を契機とする自己認識を深める下地という、実に重要な意味をもっていたのである。

## 第2章 南部農本主義への参加と訣別

南部農本主義とは、南北戦争後にアメリカを席卷した商工業イデオロギーという北部中心の価値観を真っ向から否定し、本来のアメリカの建国の理念である大地に密着した農業中心の価値観を復活させようという、いわば過去を現在に取り戻そうとする、敗者からの勝負を度外視した絶望的戦闘というべき思想運動である。ヴァンダービルト大学でウォーレンが師事したジョン・クロウ・ランサムは、この南部農本主義運動の中心人物に他ならない。彼らの宣言集『わが立場』(1930)に、ウォーレンは「黒いちごの茂み」という論文を寄稿する。

The relation of the two will not immediately escape friction and difference, but there is no reason to despair of their fate. The chief problem for all alike is the restoration of society at large to a balance and security which the industrial régime is far from promising to achieve.

(*I'll Take My Stand* 264)

ここで彼はアフリカ系アメリカ人の立場を擁護する主張をするのだが、そこで人種の隔離という手段を提示した故に厳しい批判を受ける。ここで重要なのは、弱冠25歳の彼が人種差別というデリケートな問題に正面から取り組むという、同時代のアメリカが抱える闇に正面から対峙しようとする態度を明らかにしていたことである。

当時のウォーレンの現実社会へのいささか過剰にも思われるコミットメントの背後には、20世紀初頭における、ヨーロッパとアメリカにおける思想史の大転換が、本人が意識していたか否かにかかわらず、大きな影響を与えつつ存在していたことは、否定しがたい事実だろう。アメリカにおいては、資本主義の急速な進行に一役買った適者生存のソーシャル・ダーウィニズ

ムに代表される直線的進歩史観への対抗としての南部農本主義という、過去の農業国家アメリカの理想化があった半面、西欧思想史のより広い文脈で考えれば、ニーチェの思想に集約される、事物の本質性や価値あるものへの拘泥が徹底的に否定されるという、形而上的思考の無力化があった。これらの互いに衝突する思想的状況の挟間という陥穽にウォーレンは落ち込んでいたと言っても過言ではない。彼は、文人としての経歴の開始点から、現在と過去、アメリカとヨーロッパという二重の思想的分裂のさなかにあって、両義的な周縁の場に立たされていた運命にあったのである。

死を媒介とした過去と現在の併存、自己と他者の一体感というリアリティ感覚を表現したのが、長篇小説の代表作『すべて王の臣』における、蜘蛛の巣の比喻で語られる存在の連鎖の感覚である。1946年に刊行の、ウォーレンの代表的長篇小説は、デマゴグの政治家ヒューイ・ロングをモデルとした、支配者の独善とそれを許した民衆への冷静な批判を、その人物の秘書を務めた青年ジャック・バーデンを語り手に起用して、彼の内的成長と重ね合わせて展開している複雑な形式のビルドゥングスromanである。いくつかの暴力的な死の現場に立ち会う事態を経て、語り手はひとつの回心に達する。なお、冒頭のキャス・マスターンとは、語り手が研究の対象にしていた南北戦争中の架空の人物である。

Cass Mastern lived for a few years and in that time he learned that the world is all of one piece. He learned that the world is like an enormous spider web and if you touch it, however lightly, at any point, the vibration ripples to the remotest perimeter and the drowsy spider feels the tingle and is drowsy no more but springs out to fling the gossamer coils about you who have touched the web and then inject the black, numbing poison under your hide. It does not matter whether or not you meant to brush the web of things. Your happy foot or your gay wing may have brushed it ever so lightly, but what happens always happens and there is the spider, bearded black and with his great faceted eyes glittering like mirrors in the sun, or like God's eye, and fangs dripping.

(*All the King's Men* 200)

個人が社会全体に及ぼす影響という責任の存在が、ここで端的に述べられている。そして、ヘンリー・ジェイムズが「小説の技術」で、作家の感性を蜘蛛の巣の比喻で述べていたように、ウォーレンにとっての世界の認識とは、クロノロジカルに連なった出来事の線状の連続体ではなく、面上に出来事が配置されて、意識という蜘蛛がその上を自由に行き来することができるという、自身のなかで絶えず組み替えられる動的な性質をもつものであることも表されている。この毒蜘蛛は死を明示する存在であり、古典的比喻でいえば相容れない領域を結びつける

トリックスターにほかならない。この文脈では、ばらばらに存在する複数の他者が自身にとって意味ある連関をもっていたことを、死という強制的分断で存在の連鎖が生じる逆説を感得した、成熟した秩序の感覚を物語る。この流れで、この作品の最後で、“...and soon now we shall go out of the house and go into the convulsion of the world, out of history into history and the awful responsibility of Time.” (*All the King's Men* 464) と、「世界の激動」が同格で「歴史の積み重ねが大文字の時間となる」という説明と並置され、混乱に満ちた現実のなかで生きる我々には、歴史という過去を繰り返し問い直す「畏怖すべき責任」があるというウォーレンの認識が示されているのである。

このように、死者の現前性や内面化が現実の認識に不可欠であるという、彼の文人としてのキャリアを通しての執拗なまでの主張は、現在を過去と直接に切り結び合わせようとする手法に、容易にうかがい知ることができる。アメリカ社会が過去を忘却する思考形態をもつことを、いささか強迫気味に彼が強く憂えるのは、個々人の記憶こそが、民主的な社会にむかうための決定的要素と考えるようになった危機意識が彼を突き動かしていたからである。

ウォーレンが社会的関心を強く示すようになった理由のひとつには、1930年代から40年代の世界がファシズムを経験したこと、続く第二次世界大戦後に旧ソ連に代表される共産主義イデオロギーの膨張という、民主主義を支える個人の尊厳を根本から脅かす世界情勢があっただろう。彼は「パクス・アメリカーナ」と称された繁栄の1950年代から早くも多様性への関心を見せ、それを具体的な行動に移すようになる。この頃に書いたフォークナー論で述べた、「支配的な世界の外側の流れにある人々」を彼は作品に取り上げるようになるのである。

When it is said, as it is sometimes said, that Faulkner is “backward-looking,” the answer lies, I think, in the notion expressed above. The “truth” is neither of the past nor of the future. Or rather, it is of both. The constant ethical center of Faulkner’s work is to be found in the glorification of human effort and human endurance, which are not confined to any one time. It is true that Faulkner’s work contains a savage attack on modernity, but the values he admires are found in our time. The point is that they are found most often in people who are outside the stream of the dominant world, the “loud world,” as it is called in *The Sound and the Fury*.

(*New and Selected Essays*, 204)

周縁に存在するものが中心的人物を圧倒する逆転の構図を最も端的にうかがうことができるのが、第二次世界大戦後の覇権争いのさなかの1953年に発表された、アメリカの建国の父祖のひとりで第3代大統領であったトマス・ジェファソンを正面から批判の対象とする長篇物語詩

『龍の兄弟』(1953; 1979)である。この長篇詩は、否定的事実を記憶化するための想起のプロセスを詩化した稀有な事例と考えてよい。ジェファソンの甥が犯した殺人事件という史実を題材とし、ここで彼が訴えかけるのは、事実の羅列としての歴史ではなく、個々の読者の感性により内的に再構築される、情動の作用の結果として内面化される主体的な歴史認識の重要性にほかならない。言い換えれば、個人の責任を重んじる共和主義の伝統に立つ現代アメリカの民主主義を支える、個々人の内面における能動的な記憶のプロセスを、彼は詩化したのである。

### 第3章 アメリカ社会における個人の運命に対する関心

ウォーレンはアメリカ社会の楽観主義や例外主義を鋭く批判し続けたが、その対象が社会全般という広いものから、次第に個人というレベルでその意識の変容を繰り返し説くようになった。この理由は、先に述べたように、デモクラティックな社会を構成する個人の相互批判こそが、そうした社会を支えると確信していたからに他ならない。それを反映するのが、『龍の兄弟』におけるジェファソンと語り手 R.P.W. やその他の人物との激しい言葉の応酬である。

ジェファソニアン・デモクラシーを成立させる基盤は、ルイジアナ購入に象徴されるように、土地所有者による自給自足の農民であり、商取引とは無縁であることが条件であった。しかし、その土地とは現実にはネイティヴ・アメリカンから不当に収奪した、帝国主義的イデオロギーの産物というべきものであり、この矛盾を根底から批判するウォーレンの姿勢が明らかになる。ネイティヴ・アメリカンの招魂の儀式であるゴースト・ダンスが、この詩におけるジェファソンを回心させたことに集約されるように、大統領ジェファソンに代表される白人側の歴史観の一面性を際立たせ、被害者側の存在とその歴史が並置される。多様な歴史解釈への手がかりとして、個人の想起が基盤となる役割を果たす点をこの長篇詩は強調している。

南北戦争から100年が過ぎた1960年代の混乱を経た後、1970年代半ば、今度は建国200年という節目を、ウォーレンは相当程度、意識していたに違いない。この時期に先に述べた『龍の兄弟』の改訂を進めて、1979年に新版を世に問うている。結末の部分で、作者の明らかなペルソナ R.P.W. が語り手として、視点が個人に絞られて述べられるという変更がなされる。1953年の初版から四半世紀以上後で全面的に改稿を施した1979年の新版で、ウォーレンは視点を“*We*”から“*I*”へと絞り込んで、個人という存在を際立たせようとする。

We have yearned in the heart for some identification  
With the glory of the human effort. We have devised  
Evil in the heart, and pondered the nature of virtue.

We have stumbled into the act of justice, and caught,  
Only from the tail of the eye, the flicker  
Of joy, like a wing-flash in thicket.

And so I stood on the headland and stared at the river  
In the last light of December's, and the day's, declension.  
I thought of the many dead and the places where they lay.  
I looked at the shrunken ruin, and the trees leafless.  
The winter makes things small. All things draw in.

It is strange how that shift of scale may excite the heart. (*Brother to Dragons* 131)

『龍の兄弟』の改訂を進めていたのとほぼ同じ時期、つまり建国200年前後に、ウォーレンは次々に長篇小説、詩集、評論を世に送り出す。そのなかで、ハーヴァード大学での講演を基にした評論『民主主義と詩』（1975）の主張も見逃すことはできない。

As both Rilke and Yeats have put it, the making of a work represents a plunge into the “abyss of the self.” And once the work is made, the reader, insofar as he gives himself to it, takes such a plunge, too—the plunge to explore the possibilities of his own “abyss.” In the complexity of this whole situation we find, then, echo upon echo, or mirror facing mirror. But in the end, as Henri Bergson once said, the work returns us—the readers, the spectators—“into our own presence.” It wakes us up to our own life. (*Democracy and Poetry* 71)

ウォーレンは、民主主義の根幹を構成する個人としての責任の自覚を問うている。彼が押し進めたニュークリティシズムがイデオロギー的に統一された主義主張をせず、あくまでも作品の解釈の多様性のみ読者の自覚をうながすのにとどまったのは、個人を重視して民主的価値観の維持と発展を期す戦略的な姿勢であったといえよう。そして、エリオットの「歴史的感覚」の基礎となったバルクソンの「純粹持続」への言及があるように、「個人の深淵」つまり過去は現在と不可分であるという、変わらぬ信念がここに披歴されている。

1977年の講演「過去の効用」は、民主主義の社会を支える個人が過去を絶えず再解釈する責任をもつと主張する。

And yet, in a way, it[the past] “gives” us nothing. We must *earn* what we get there. The past must be studied, worked at—in short, created. For the past, like the present, is fluid. History, the articulated past—all kinds, even our personal histories—is forever being rethought, refelt, rewritten, not merely as rigor or luck turns up new facts but as new patterns emerge, as new understandings develop, and as we experience new needs and new questions. There is no absolute, positive past available to us, no matter how rigorously we strive to determine it—as strive we must. Inevitably, the past, so far as we know it, is an inference, a creation, and this, without being paradoxical, can be said to be its chief value for us. In creating the image of the past, we create ourselves, and without the task of creating the past we might be said scarcely exist. Without it, we sink to the level of a protoplasmic swarm. (New and Selected Essays 50–51)

『すべて王の臣』の蜘蛛の巣の比喩による認識作用が、30年以上が過ぎて、過去を再解釈し意味を見出す個人の責任として敷衍されているのである。

1978年の詩集『現在と過去』は、彼の文学作品群のなかで後期の始まりを告げる詩集として位置づけられ、彼は老境にある自分自身に正面から向き合う姿勢を明確に打ち出している。ウォーレンに三度目のピューリツァー賞をもたらしたこの詩集は、過去の出来事を回想する自伝性の濃い詩から成る“Nostalgic”と、抽象的な思索が現在において展開する“Speculative”のふたつのセクションに分かれている。まず始めのセクションで現在から過去の出来事の意義が再解釈され、その認識が次のセクションで“Time”をめぐる思考として展開する。この詩集で彼は、記憶という認識作用に関する常識的理解を問い直し、現在という時点に存在している立場から遠い過去の出来事を回想して、自伝的記憶が現在の自分にいかなる意味をもっているかを考えている。Now and Then というタイトルから連想されるのは、現在と過去とを併置して表現する思考であろう。ここでのウォーレンは、過去を単純に重層化するのではなく、過去をひとつの平面と規定して、現在と過去とは並び立つものであるという認識を打ち出す。この詩集で扱われている過去の記憶は、現在の自分のもつ意識のすぐ直下に位置すると強調される。師と仰いだランサム の1974年の死、そして長年の盟友アレン・テイトは病気に苦しみ、この詩集の翌年1979年に亡くなる。1989年に生涯を閉じることになるとはいえ、終わりに近づく自分を十二分に意識した詩人は、最終的には個人の消滅という死、つまり自分が過去のなかへと向かう時間の流れのなかにある事実を受け容れながらも、個体としての死を乗り越えて、超越的かつ抽象的な「時間」という、普遍性を模索する方向へ創作活動のエネルギーを注いでいる。

ウォーレンは現実の場に「時間」を求めても得られることはないかと断言する。この詩集のな

かに収められた「アイデンティティと祈りへの議論」で、語り手は帰るつもりがなかった場を、再び訪れる。現在の場には、過去の同じ場は決して存在しない。それを語り手は、現実という具体的な場には「時間」を求めることの不可能性を、「時間」をウロボロスの的に提示して浮かび上がらせる。

For that old *I* is not *I* any more, though  
A ghost somewhat different from that of  
The truly perished companion, for the *I* here now  
Is not dead, only what  
I have now turned into. This  
Is the joke you must live with. Have you ever  
Seen serpentine Time at the instant it swallowed its tail? (Collected Poems 373)

ウォーレンが重視しているのは、実際の死者ではなく、概念としての死者を意識して、自分の生が死者に支えられていると実感し、ふたたび日常へと回帰していく円環状の意識作用である。この認識の構図は、これらの作品が書かれていたのと並行して改訂が進められていた『龍の兄弟』のテーマでもある。また、主体性の回復という論点は、この当時の批評の一大潮流、ディコンストラクションが唱えた、自律した主体性への懐疑に対する暗黙の批判であるかもしれない。

過去への探究は、1985年刊行の最後の詩集『高さところと広がるところ』においてその頂点に達する。抽象性を追求するテーマを内包する「妄想？ 違う！」では、自身が到達した高揚した感情を直接に言葉にしている。この作品は、詩集全体に展開した詩人の思考を総括するきわめて重要な作品である。

In atmosphere almost too heavenly  
Pure for nourishment of earthbound  
Bone, or bone-borne flesh, I stood,  
At last past sweat and swink, at crag-edge. Felt  
My head swell like the sky that knew  
No distance, and knew no sensation but blueness.

In that divine osmosis I stood

And felt each discrete and distinct stroke

Of the heart as it downward fled—

(*Collected Poems* 581)

この詩集の他の作品で、詩人は自身の頭蓋骨について繰り返し言及していたが、最終的に、この頭蓋骨はすべてを包摂する大空と形容される。そして、「翼のように両手を広げ」上空から見渡すと、自分を支えるすべての力を知るに至る。ここで、個人の死が他者との連関に直結しているという認識が示されているのである。こうした抽象的な思考を見せながらも、“as it downward fled” とあるように、意識は常に、天上ではなく下界、私たちが現実には生きている世界に向いている点も見逃してはならない。

最後のセクションIXは、「山の夜明けの神話」という詩のみで成り立っている。こうした特異な設定、そして詩集の最後に配される作品であるゆえ、この詩にはいっそうの意味深い内容が与えられていると考えられる。この謎めいた内容の詩は、最後に蜘蛛の巣のイメージが現れる。

How soon will the spiderweb, dew-dappled, gleam

In Pompeian glory! Think of a girl-shape, birch-white sapling, rising now

From ankle-deep brook-stones head back-flung, eyes closed in first beam,

While hair—long, water-roped, past curve, coign, sway that no geometries know—

Spreads end-thin, to define fruit-swell of haunches, tingle of hand-hold.

The sun blazes over the peak. That will be the old tale told.

(*Collected Poems* 584)

「蜘蛛の巣がポンペイのような栄光に光る」のを、詩人が待ち焦がれるのはなぜだろうか。蜘蛛の巣とは、『すべて王の臣』でそうであったように、存在の有機的連鎖の象徴であり、さらには詩人の鋭敏な感受性の比喩でもある。ここの未来形が、その後に続くポンペイの火山の爆発の犠牲者を石膏で型をとって現われた姿と並置され、生命力に満ちた若い女性が復活するという幻想が、過去から現在へのよみがえり、そして未来という流れをひとつのものとしている。最後に、「これは語られる昔話となるだろう」という、一般化を志向する詩人の自信を示唆する宣言で閉じられる。こうして、死者に集約される過去を絶え間なく想起することで未来がつくられるというウォーレンの信念が詩化され、この詩集のみならず、かれの創作活動の総体を総括する荘厳なヴィジョンが立ち現れている。ヴェスヴィオ火山の突然の噴火により封印された日常生活が後世になって発掘されたことで、その当時の市井の人々が現在によみがえったひとつの啓示的体験は、死を媒介とした過去の記憶の復活を終生にわたって模索した詩人

ウォーレンにとって、自身の集大成である最後の詩集の最後を飾るにふさわしいモチーフとなった。ポンペイとは、死者の招魂であるばかりでなく、平凡な日常生活が後世に集合的歴史の記憶を物語るようになるという、個人的記憶が普遍性をもつに至るプロセスの具体化である。過去を忘却から救出するだけでなく、将来へと継続させる想起という積極的な意識の認識作用を詩化するうえで、ポンペイという舞台は不可欠だったのである。

## 結論

ウォーレンが死という概念を執拗に追究したのは、死によって生が区切られ過去が生じるという、単純であるが見落とせぬ事実ゆえである。個々の人間は死によって強制的にこの世界と分断されることによって、現在から過去へと移行し死者として歴史性を獲得する。いわば死によって固有性を与えられた、他者との代替が不可能な自己という独立した物語となる。後世の人間が死者の人生を積極的に読み解き、その物語が社会的に共有されることで、個人の過去は現在の社会に復活するに至る。それゆえに、過去すなわち死者とは、私たちが有機的に結び合わせる鍵にほかならないと、彼は確信していたに違いない。ニュークリティシズムの指導者としての彼の信念も、過去の作品という死者からの贈与物を、純粹に作品そのものとして現在において再解釈し、個人とその集合体である社会の成長に寄与せしめるものであったといえよう。つまり、文学を解釈する行為とは、死者の復活を意味するのである。

ウォーレンの文学作品の総体は、死により裏打ちされた想起という認識作用により編み上げられた、ひとつの大いなる蜘蛛の巣である。ウォーレンにとって、記憶を想起することにより出現する内的世界は蜘蛛の巣のごとく一つの面をなし、過去の出来事は平面上にちりばめられた要素となっている。T. S. エリオットが「伝統と個人の才能」で語った、過去を過去のものとして片づけるのではなく、現在のなかに過去が同時に（言い換えれば平面的に）存在していることを認識できる感性である「歴史的感覚」の概念は、ウォーレンの文人としての遍歴に終生にわたり影響を与え続けたといってよい。この認識が、晩年の詩集における、自伝的過去と公的記憶との併置により、個人の記憶が普遍性を備えているというヴィジョンへと展開する。最晩年のエッセイ「詩はひとつの自伝」（1985）では、自身の詩集の内容は自伝に他ならないと彼は宣言するに至るほどである。

最近の研究のトレンドのひとつに、記憶をめぐる、哲学・歴史学・心理学・社会科学を横断する、分野を超えた方法論が模索されている。そのなかで共通する認識は、過去をめぐる想起は政治的なものであり、伝統とは所与のものではなく絶えず作り直されるという大前提である。現在、過去の解釈の多様性がこれまでになく重要になってきており、ごく最近の、互いに

排他的なイデオロギー対立に起因する多くの国際問題が、その動きを加速させている。少し前ならば冷戦やヴェトナム戦争が容易に思い出されるが、それらは現在、どこまで検証されているだろうか。国際紛争や人種差別問題や銃規制問題といった重大な論点が繰り返しニュースに取り上げられる事実も、過去に学びそれを未来に生かすことが実に難しい証拠だといえるだろう。ソーシャルメディアの普及でかえって個人や小集団が排他的になるアイロニックな現象も、新たな伝統や共通の価値観の創造の困難さを物語る好例となるかもしれない。こうした状況にあって、『龍の兄弟』の序文の結びの一節、“Historical sense and poetic sense should not, in the end, be contradictory, for if poetry is the little myth we make, history is the big myth we live, and in our living, constantly remake.” (BD, xiii)において、“live”が“remake”と言い換えられていることからわかるように、彼にとって生きるとは、歴史を常に読み直すことであつたのである。ウォーレンの作品群を貫く中心主題である、多様性と和解が共存する過去を絶えず再解釈する重要性は、民主主義の危機のみならず、世界規模で社会の秩序構築が改めて模索され始めたいま現在も、まったく失われていないというべきだろう。

## 謝辞

本稿は、2022年11月25日開催の愛知学院大学語学研究所第37回研究発表会における口頭発表原稿を基に、加筆修正を行ったものである。また、本稿の一部は、2021年4月24日に開催された日本アメリカ文学会中部支部第37回大会でのシンポジウム「アメリカ文学における民主主義へのまなざし」で発表した内容と重複するが、論じる文脈は異なっている。

## 註

- 1) これらの取材記録は、ヴァンダービルト大学図書館アーカイブのウェブサイトで、インタビュー音声とそのトランスクリプトが一般に公開されている。

## 参考文献

- Blotner, Joseph. *Robert Penn Warren: A Biography*. Random, 1997.
- Burt, John, ed. *The Collected Poems of Robert Penn Warren*. Louisiana State UP, 1998.
- Corrigan, Lesa Carnes Corrigan. *Poems of Pure Imagination: Robert Penn Warren and the Romantic Tradition*. Louisiana State UP, 1999.
- Ellenberger, Henri. “La Notion de Maladie Créatrice.” *Dialogue: Canadian Philosophical Review*, vol. 1, 1964, pp. 25–41.
- Eliot, T. S. “Tradition and the Individual Talent” in *Selected Essays*. Faber and Faber, 1932.
- Justus, James H. *The Achievement of Robert Penn Warren*. Louisiana State UP, 1981.
- Koppelman, Robert S. *Robert Penn Warren’s Modernist Spirituality*. U of Missouri P. 1995.

- Runyon, Randolph Paul. *The Braided Dream: Robert Penn Warren's Late Poetry*. UP of Kentucky, 1990.
- Strandberg, Victor H. *The Poetic Vision of Robert Penn Warren*. UP of Kentucky, 1977.
- Twelve Southerners, *I'll Take My Stand: The South and the Agrarian Tradition*. 1931; Louisiana State UP, 1977.
- Warren, Robert Penn. *Brother to Dragons*. 1953; Louisiana State UP, 1979.
- . *New and Selected Essays*. Random, 1989.
- . *Democracy and Poetry*. Harvard UP, 1975.
- . “The Use of the Past” in *New and Selected Essays*.
- Watkins, Floyd T. *Then & Now: The Personal Past in the Poetry of Robert Penn Warren*. UP of Kentucky, 1982.
- Watkins, Floyd T. and John T. Hiers, eds. *Robert Penn Warren Talking*. U of Georgia P, 1990.

- アライダ・アスマン著、安川晴基訳、『想起の空間 文化的記憶の形態と変遷』（水声社、2007年）
- 木村敏、『関係としての自己』（みすず書房、2005年）
- 中井久夫、『徴候・記憶・外傷』（みすず書房、2004年）
- 野家啓一、『物語の哲学』（岩波現代文庫、2005年）
- ポール・リクール著、久米博訳、『記憶・歴史・忘却』上下巻（新曜社、2004年）
- 渡辺哲夫、『死と狂気』（ちくま学芸文庫、2002年）
- 『思想』（「ヘイドン・ホワイトの問題と歴史学」）、（第1036号、岩波書店、2010年8月）